

[24]韓国研究センター年報

<https://hdl.handle.net/2324/7218211>

出版情報：韓国研究センター年報. 24, 2024-03-21. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



九州と世界市民、そして東アジア連帯

尹 海 東*

1. 歓待

「九州大学までは、私がお送りしますよ。ちょうど家路ですし。」2023年7月18日、午前11時10分頃、私は九州大学伊都キャンパスの東側、糸島半島の海沿いで道に迷い、タクシーを呼ぶために小ぢんまりしたホテルへ入ったばかりだった。初めて九州大学の韓国研究センターを辿って行くところだったが、九大学研都市で降り、九州大学行きバスに乗り間違えた末、とんでもない場所で迷子になったのである。ホテルの受付のスタッフに問い合わせると、迎車は、30分以上かかるという。九州大学韓国研究センターの永島広紀教授との約束の時間は、とうに過ぎていた。その際、折しも夜勤を終えて帰ろうとしていたホテルの従業員が、私を大学まで送ってくれると言い出した。2023年7月、私の九州大学滞在は、こうしたホテル従業員の好意から始まった。

2023年のはじめ、コロナウィルスによるパンデミックの状況がおさまり、空港にも活気が戻りつつあった頃、この変化にもっとも敏感に反応したのは福岡空港だったのではないかと思う。2023年の春から韓国人の観光客が福岡へ押し寄せたが、私もこの流れに便乗し、九州大学での滞在を決心したのである。九州大学韓国研究センターの永島広紀教授は、快く私を外国人研究員として受け入れてくれた。こうして、2023年7月15日に福岡での生活がはじまり、同年8月24日にいたるまでの40日間、私は、この「美しい」都市で住んだ。

* 韓国研究センター外国人訪問研究員（2023年7月14日～2023年8月24日）

私の宿所は、福岡の中心部である薬院駅前交差点近くの小さいアパートだった。九州大学のゲストハウスは、予約開始早々、予約が埋まってしまい、部屋を借りることができなかった。おそらく、ポストパンデミックの際の訪日ブームが響いていたのだろう。ただ、エアビーアンドビー（AirB & B）を通して見つけたアパートは、やや高かったものの、福岡市民の日常を味わう上では打って付けの場所だった。しかも、私の住処は、福岡随一の繁華街である天神エリアから程近いところにあった。

天神の地下鉄駅まで行き来すると、街を埋め尽くした人波のなかで韓国人の若者たちをよく見かけた。当時、福岡を訪れた外国人の7割が韓国人だった。この現象について、韓国では、リベンジ・ツアー（revenge tour）とも評していた。パンデミックのせいで取り止めとなった海外旅行への欲求を、近い日本、なかでも九州地域へ押し掛けて一気に解消すること！外国人の観光客は、グルメ・レストランや温泉、観光名所に溢れた。グルメ・レストランで食事をするためには、長蛇の列に並ばねばならなかったが、殆んどの人が、その苦労をものともせずに行った。福岡の街には、友情や歓待が満ちていた。

調査旅行に出かけない日には、大体、研究室と中央図書館の間を往復しつつ過ごした。広々として快適な研究空間で読書三昧に入り、蒸し暑い夏も忘れることができた。2023年8月の夏といえば、国連事務総長が、地球が温暖化（global warming）を超え、沸騰化（global boiling）へ向かっていると呼び掛けた頃である。韓国研究センターと中央図書館は、精巧な空中回廊を通して繋がっており、猛烈な日差し

や俄雨を避けることができた。資料室と閲覧室が見事に調和している中央図書館は、私にとって特に幻想的な思い出として残っている。ある日、韓国研究センター長の元兼正浩教授に、「こんなに幻想的な大学図書館で勉強できる九州大学の学生さんたちは、実に祝福された人々」と羨ましさを率直に告白したこともある。

「いい土曜日ですね！」7月末の物静かな午後、あるお婆さんが銭湯の主人へ声をかける。真夏の雨が降ったりやんだりするなか、私は妻とともに温泉で有名な大分県由布院のとある銭湯に入った。観光バス2台で移動する韓国人のパッケージ旅行客とともに、あの有名な九州の温泉を堪能すべく、由布院についたところだった。

妻は、大型ホテルや旅館の高級温泉ではなく、古びた下町の銭湯を体験したいといった。その銭湯の入場料は、たったの200円だった。タオルや石鹸、シャンプーなど何一つ備わっていない。浴室は、100年は優に超えていそうな佇まいであり、シャワーすら設置されていない。にもかかわらず、ここは温泉の醍醐味が味わえる場所である、と私たちは思った。何より、下町特有の温もりがよかった。彼らは、我々を気兼ねせず優しく受け入れてくれた。これこそ、「ローカルから世界へ」というスローガンに合致するものと、私は感じた。

海辺のホテルや、大学の研究室、中央図書館、そして由布院の古びた銭湯で私が感じとったのは、まさに歓待であった。最初から私を歓迎してくれた福岡と九州を通して、私は九州と韓国が結んできた韓日関係の歴史を眺望してみたいと思った。これは、九州大学に滞在しながら私が掲げたもっとも重要な目標の一つだった。

2. 歴史

福岡に到着した翌週の月曜日、早速下関を訪れた。折しも7月17日は、海の日で休日だった。下関までの旅路は、早くて便利だった。小倉まで新幹線で行き、山陽本線に乗り換えると、間もなく下関に着いた。だが、下関駅前で眺めた旧港、海峡夢 TOWER

で見下ろした下関、その向うの門司港、そして唐戸市場へ至るまでの町並みは、すべて見窄らしく、閑散としていて驚かされた。下関の風景は、高齢社会日本が直面している地方都市の現実を赤裸々に見せつけていた！韓国人が、大いなる悲哀と少々の恨をもって回想してきた植民地時代の下関を訪れることは容易いことではない。私は、下関に対し、帝国の栄光で輝く、人々の往来で賑わう繁華街のイメージを描いていたのだろうか。

少しは失望し、だからこそ少しは安堵した気分で海辺を辿りつつ、春帆楼へ向かった。春帆楼は、1895年の清日戦争で勝利をおさめた日本の伊藤博文が清の李鴻章を呼びつけ、講和会談を行った場所！伊藤は、ふぐ料理で有名な料亭を講和会談の場所と決めた。私は、ずっと前から、東アジアの運命を分けた場所、春帆楼に行ってみたかった。下関への調査旅行は、実に、ここを目指していたのだろう。今日も割烹旅館として運営されている春帆楼には、宿泊者以外は入場禁止という案内文が張りつけられている。その代り、春帆楼の手前に小さく建てられた日清講和記念館には、無料で入られた。日本の威力を誇示するような古ぼけた展示に、かえって「心苦しく」なったのはなぜだろう。

関門橋の下で遊覧船に乗り、門司へ渡る。しかし、あの有名な貿易港門司の面影はどこにもなく、関門海峡博物館とともに観光地門司だけが残っていた。再びJRで小倉へ向かう。八幡製鉄所とともに産業都市として名を馳せていた場所！そのため、2度目の原爆の投下地に指定されるも、天候のおかげで運良く破壊を免れた都市、小倉。産業都市の面影は消え去り、今は小倉城の名で残っているのみ。こうして私の九州滞在は、下関と門司、小倉の旅から始まった。

私の2回目の調査旅行の行き先は南にあった。福岡から新幹線で1時間ほど南下すると熊本があり、さらに20分ほど行くと水俣という街がある。私は昔から「水俣病」という環境災害で有名な都市の名前を知っていた。そしてその都市は、日本化学工業の本山として知られる日本窒素肥料株式会社の本拠地だった。1930年代、咸鏡南道の興南を中心に進めら

れていた「朝鮮兵站工業化政策」は、いわゆる朝窠（朝鮮窠素肥料工業株式会社）が中核を成していた。朝窠の母体となった企業が日窠ではないか。野口遼が日窠を中心に築き上げた、いわゆる「日窠コンツェルン」の軸の一つは朝窠だった。その日窠の本拠地が水俣であることを知ったのは、私が植民地時代の歴史を勉強し始めてから大分後のことだった。私を水俣に導いたのは、「植民地」研究への申し訳なさ(?)とともに、水俣病、つまり公害病への好奇心だったのだろう。

日差しがかんかん降り注ぐ7月30日の真昼、新幹線の駅から水俣病資料館（水俣市立）に向かう町営バスに乗った。資料館はかなり広い広場と陸上競技場の向こうの海辺に位置していた。広場を渡り、丘を登って資料館に入るまで、人の影すら見当たらなかった。1940年代後半から水俣には、意のままに話せず、筋肉がねじれ、手足が麻痺し、やがて死に至る住民が少しずつ現れ始めた。窠素肥料工場から排出された汚染物質による水銀中毒が原因であることが確認されたのは、20年後のことだった。こうして、日本企業史に輝かしい金字塔を築き上げた「日窠コンツェルン」も、汚名を残し崩壊してしまった（宇田川勝、『日本を牽引したコンツェルン』、芙蓉書房出版、2010）。水俣海浜の広場や競技場、資料館は、汚染された干潟を埋め立てた干拓地の上に作られたものだった。そして、今なお、物寂しかった！

現在も市の中心を占めている窠素肥料工場を通り抜けると、徳富蘇峰の生家がある。この地方の有力商人の末裔に相応しく、残された彼の家は大きく立派だ。ふと、玄洋社、大陸浪人、乙未事変（閔妃弑害事件）、韓日合併などの言葉が頭をよぎる。ああ！水俣が熊本県の一部を占めていたのだな、だから徳富蘇峰のような人を生んだ街だったのだな、徳富蘇峰は『国民新聞』の社長として、1910年代に朝鮮総督府機関紙『毎日申報』の顧問を務めた人だった。

私の3回目の九州歴史旅行は、「壬辰倭乱（文禄・慶長の役）」の痕跡をたどることだった。肥前の名護屋と有田へ行くことは、長年の宿願の一つだったので、今回はバスに乗ってでも必ず行ってみたかった。たまたま私の希望を聞いた福岡大学の柳忠熙准

教授が自ら運転ボランティアを申し出てくれた。韓国研究センターの吳獨立助教と一緒に柳准教授の乗用車に同乗して視察に出かけたのは、台風が接近しつつあった8月8日だった。幸い、台風は九州地方をかすれるという予報だった。

壬辰倭乱が勃発する2年前の1590年、朝鮮は日本の事情を探知すべく、通信使を日本に送った。日本が朝鮮を侵略するという風聞があるが、果たしてそれが本当なのかどうかを探知する必要があった。しかし、正使黄允吉と副使金誠一は真っ向から対立する報告をした。正使は日本が侵略すると報告したのに対し、副使はその見解を全面的に否定した。正使は西人、副使は東人であり、これまで学界ではこのような意見の食い違いを党争の結果と理解してきた。しかし、私はこのような解釈自体が理解できなかった。いくら資料をめくって組み合わせてみても、政治的立場の違いだけでは納得できなかった。朝鮮人たちは、なぜ豊臣秀吉の朝鮮侵略を理解できなかったのだろうか。詰まるところ、いったいどういう理由で壬辰倭乱は起きたのだろうか。

本州の大都会、名古屋と同じ名前の都市が九州にあり、それが壬辰倭乱の前哨基地であったことを知り、私の好奇心はさらにそそられた。もしかしてそこに行けば、豊臣が朝鮮を侵略した理由を推測できるのだろうか。唐津市を過ぎて田舎道をしばらく行くと、佐賀県北海岸の西端に名護屋城跡がある。かなり広く、険しい海辺の断崖の上に、国家特別史跡に指定された名護屋城の痕跡が残っていた。戦国時代を終え、「天下」の覇権を握った豊臣秀吉は、2年前から全国の大名たちを名護屋城の下に集め、朝鮮侵攻の準備を進めていた。展望台の前に立つと、目の前に壱岐島と対馬島が見え、遠くに鎮海沖がうっすらと姿を現す。よく整理された名護屋城博物館があり、周辺のインフラもよく整ってあるが、観覧者はあまり多くないようだ。壬辰倭乱は、もはや大衆の関心とは無縁のものになったのだろう。

対馬の使者が朝鮮に送った文書には、征明假道が朝鮮侵略の理由として明記されていた。日本は明を打つために行く道だから、朝鮮はただ道を貸してくれればよいということ！豊臣は日本を統一するや、

今度は中国（明）を征伐し、インド（天竺）まで境界を広げると公言していた。その第一のステップとして、豊臣は朝鮮の服属をあげた。つまり、豊臣は朝鮮が入藩の要求を拒否した場合、これを征伐し、中国とインドへ進むべしと豪語していた。豊臣が朝鮮を侵略するだろうという噂は、すでに朝鮮の使者が日本に行ったとき、誰もが知っている公然とした事実だった。

しかし、朝鮮の二人の使者や王朝の重臣たちは、このことを理解できなかった。どうして倭が明を打つことができ、また、どうして明の向こうに別の世界がありうるだろうか。彼らはそのような世界を受け入れることができなかった。豊臣秀吉、つまり倭が朝鮮を侵略するという噂は、朝鮮人が理解できる世界の向こうにある、別の世界への想像であった。ようやく私は二人の朝鮮人使者の立場を理解することができた。彼らの間には全く食い違いがなかったのだ。彼らは明を中心とした中華世界の向こうの世界を理解、あるいは想像することができなかった。したがって、倭が朝鮮を侵略しようが、しないようが、彼らにとっては同じことだった。

もちろん、証明假道という言葉や論理も、対馬島主や彼の舅である小西行長が作り出したものだった。豊臣秀吉は、朝鮮がすでに日本の藩国になっていると思ったが、対馬が、このことを朝鮮に知らせることはできなかった。対馬は朝鮮王朝と日本の将軍の間で危うい綱渡りをしなければ、生き残ることができない存在だった。

壬辰倭乱で倭軍の先鋒となったのは、小西行長と加藤清正の二人であったが、彼らはライバル関係にあり、結局、豊臣秀吉の死後、別々の道を歩んだ。小西は大坂の商人出身で、父とともに早くからカトリックに帰依した敬虔な信者であった。彼は平壤までほとんど何の支障もなく進軍し、そこで長らく滞在した。すでに宣祖は義州まで「逃亡」して明に入る準備をしていたが、小西は平壤を離れなかった。小西行長はカトリック信者として、悲惨な戦いや殺戮を可能な限り避けたかったのだろう。彼が明の無頼漢出身の沈惟敬と平和のための綱引きを長く続けたのは、このような理由からだった。

壬辰倭乱は「陶磁器戦争」、あるいは「文化戦争」とも呼ばれる。九州地域の大名たちが特に多くの朝鮮人陶工を捕虜にし、彼らが17世紀近代ヨーロッパ人を魅了した日本陶磁器の起源を形成したという事実はよく知られている。なかでも陶祖李参平が陶磁器を焼いていたのが有田である。陶山神社があり、その奥の丘の上に李参平を記念する碑石（陶祖李参平之碑）がある。名護屋から有田へ行く道は、遠くて険しかった。険しい山中で瓷器の材料である高嶺土を探し求めた李参平の心を察して見ろ、ということだったのか。

水俣に寄ってから、熊本へ帰る途中、私は旧城下町に所在するホテルで一泊した。熊本城の下には加藤清正の銅像があり、背の高い姿を見せるために高い帽子をかぶっていたという解説があった。彼が9尺の長身だったという、かなり広く知られている「歴史上の噂」(?)にこっそりと失笑する。復元中の天守閣を急いで見て、城下のウルサンマチ（蔚山町）に向かう。バス停に看板だけがぼつんと立っていて、蔚山町の昔の痕跡を確認する方法はない。丁酉再乱の際、蔚山に倭城を築き粘っていた加藤は、撤退しながら多くの蔚山住民を熊本に拉致した。彼らは熊本城の築城工事に大分動員され、加藤は築城の専門家として名を残した。

小西行長は熊本の南にある宇土に、加藤清正は熊本に、それぞれ領地を与えられた。小西は徳川家康に立ち向かって消え、加藤は徳川の味方になって出世した。加藤は熊本の大名として壮大な熊本城を築き、長く栄えた。カトリック信者として朝鮮侵略に消極的だった小西と、その小西を勿体ないと見ていた加藤との違いを、熊本で確認しようとしたのだろうか。

私は下関で清日戦争の影を感じ、水俣で植民地工業化の核心を探ってみたかった。そして、佐賀と熊本のあちこちを歩きまわりながら、新たな目線で壬辰倭乱を想像してみたかった。2023年の夏、私の九州踏査はこうして続いていた。

3. 現実

水俣病資料館からの帰り道。JR 水俣駅前の旧市街で感じた戸惑いは、数ヶ月経った今も鮮明に記憶に残っていた。駅周辺は人影が見当たらないほど閑散としていて、商店や住宅の半分以上は空き家のように見えた。日差しの強い真夏の昼間だったことを考慮しても、その衝撃は長引いた。ある種の奇妙ささえ感じられた。高齢社会の地方都市が直面しなければならない運命のようなもの、すでに下関で少しは感じていた。日本全国に8百万戸以上の空き家があるという報道を見たことはあったが、まさかその現場をこのように目の当たりにするとは思わなかった。

1990年代のいわゆるバブル崩壊以降、日本が経験してきた「失われた30年」の本質が社会の高齢化にあったという事実は、今やよく知られている。急速に高齢化が進み、また世界最低の出生率を記録している韓国社会にとっては他人事ではない。韓国の地方都市が甘受せねばならない運命だろう。韓国のすべての地方都市は、今、消滅が予想される状態にある。ただ、予想時点において若干の差があるだけだ。地方大都市の都心部にある小・中学校が次々と消滅しており、就職のできない教育大学（小学校教師養成）と師範大学（中等学校教師養成）の人気は急速に低下している。韓国では、日本の歴史的経験を反面教師にすべきだという議論が盛んだが、実際に何をどのように学ぶべきかについてはあやふやだ。

高齢社会日本の経験をどう学ぶべきか、私はこれを話頭にして、むしろ「老人天国」がもたらす老人と平和について突飛な(?) 想像をしてみたい。人口が若く、速いスピードで増える国が内戦を経験したり、経済的崩壊を経験する可能性が高い、ということは「人口学」の定説である。特に経済成長率が低く、若い人口が経済にうまく統合されなかったり、社会に生産的な貢献をする可能性が低い場合には、そのような不安の可能性はさらに大きくなる。

たとえば、イスラム原理主義を膨張させる主要要因の一つとして、社会に正常に統合されなかった若者人口の爆発的増加があげられる。とくに2010年に

チュニジアで発火し、その他、北アフリカや中東の国々に広がったいわゆる「アラブの春 (Arab Spring)」が、このような脈絡をよく説明してくれる。当時、反政府デモによって、チュニジア、リビア、エジプト、イエメンの政権が崩壊し、シリアとバーレーンの政権も大きく動揺したり、内戦へとエスカレートした。アラブの春は、民主化や自由化はおろか、混乱と内戦という無秩序だけをもたらした (폴몰런드 저, 서정아 역, 『인구의 힘』, 미래의 창, 2020 [ポール・モーランド著、ソ・ジョンア訳、『人口の力』、未来の窓、2020])。

しかし、人口が最も高齢化した社会である日本やEUの一部の国（ドイツなど）は、最も平和的な社会を維持する可能性が高い。たとえば、日本の平和憲法9条改正に関する世論調査をみても、改正反対世論が最も高い年齢層は、やはり60代以上である。彼らの多くが戦争を経験したことがあるためでもあろうが、年齢が高い人ほど秩序と安定を求める傾向が強いという事実とも関係があるだろう。そう考えてみると、高齢社会が必ずしも悪いことではないことも自明である。高齢社会日本がこれから歩む道が、人類の未来に他山之石の役割を果たすことになるだろう。

ロシアのウクライナ侵略で勃発した「ウクライナ・ロシア戦争」を「40代の戦争」と表現した記事を見たことがある。最初から予備軍が大量に動員されたウクライナは言うまでもなく、ロシアも高齢の予備軍を徴集しなければならなかった状況をよく表している。兵力の消耗に苦しんでいるウクライナでは、50代も徴集されているという報道が出るほどだ。すでに高齢社会に突入した国はもちろん、高齢化している社会では、戦争の担い手が主に40代にならざるをえないだろう。これは高齢化社会が避けて通れない運命ではないだろうか。40代が兵力の大半を占めるとしたら、その軍隊が果たして正常に機能するだろうか。延々と続く無理な消耗戦は不可能となるだろう。

九州大学のキャンパスで日々学生たちと接していると、ふと気づいた新しい現象がある。それは、肌の色が異なる人種の学生が占める割合がかなり高い

ということ！一見見た目だけでは見分けがつかない韓国や中国など周辺国からの学生を考慮すれば、外国人留学生の数は、私の直感をはるかに上回るに違いない。私はこのような推定を資料で確認しようとは思わない。おそらく事実だろうし、しかもその割合がさほど重要だとは思えないからだ。すでに九州の日常の中に多くの外国人学生が入り込んでいることがわかるからだ。

私はある日、コンビニでアルバイトをしている人のほとんどが、東南アジアや南アジア出身であることに気づいた。そして、書店でも、レストランでも、その他多くの場所で彼らに出会うことができた。昨年1月に京都に滞在したときにはほとんど感じなかったことだった。その間に、日本の日常の中に外国人がもっと深く入り込んでいるのだろうか。少子高齢社会がやむを得ず直面しなければならないこと、それは外国人移民の受け入れではないだろうか。ここでも日本は韓国の教師の役割を果たしているのだろうか。

高齢社会が持つ平和志向の意識は、外国人移民の受け入れと絶妙な組み合わせとなりうる。すでに九州の学校や地方のあちこちで、私は多文化社会が持つ安定や平和志向の意識を確認することができた。私が九州で感じた温かい歓待やほっこりとした情熱、それがまさに多文化社会への指標なのではなかろうか。その点において、九州は私と韓国の師匠である！

4. 連帯

7月の最後の日の蒸し暑い午後、私は熊本駅からタクシーに乗って五高記念館（Memorial Museum of 5th high school）に向かっていた。五高記念館は熊本大学構内にあったが、かなりわかりにくい一角に位置していた。年配の運転手は五高をよく知っていた。植民地時代のいわゆる旧制「高等学校」という制度は、「帝国大学」の予科のような役割を果たしていた。彼は記念館に着くと、詳しく案内もしてくれた。

帝国日本には、五高を含むいわゆるナンバースクールが8校、そして各地の地名を冠した地名高校と同

じ資格を持つその他の学校を合わせて34校ほどの高校があった。植民地本国の帝国大学に行くには、高校を卒業したほうがよかった。そして多くの朝鮮人は本国の高校を卒業して帝国大学に直行するコースを追求していた。永島広紀教授の研究によれば、熊本の五高や鹿児島県の七高そして佐賀にあった佐賀高等学校には、かなりの数の朝鮮人が入学した。もちろん福岡にも、戦後九州大学に編入された、福岡高等学校という地名高校があった。今は福岡市内の六本松の地下鉄駅に碑石一つが残っているが、私は朝方、六本松まで散歩するのが楽しみだった。

近代日本には都合9つの帝国大学があり、そのうち7つが本国にあった。九州帝国大学もその一つで、九州にあった旧制高校と九州帝国大学には多数の朝鮮人が入学し、彼らの多くが戦後の韓国で社会建設の中核的役割を果たした。彼らをただ「親日派」と非難して排斥してしまうのは、穏当な歴史的態度ではない。韓国社会の性格を正しく理解するためには、九州のあちこちで教育を受け、韓国で活動した彼らについて正確に知る必要がある。

五高記念館から再び駅に戻るまでの間、タクシーの運転手とは色々な話をした。他の歌手は誰も知らないが、韓国のBTSは知っている、ちょうど台湾の半導体会社TSMCが熊本に投資し、雇用を生み出していることに感謝するともいった。熊本に大きな誇りを持っている彼から、傲慢さや排他的な感情は少しも感じられなかった。

2024年1月13日、台湾の総統選挙で頼清徳民進党候補が当選した。彼は鮮明な台湾独立論者であり、習近平の中国が敬遠する人物だが、台湾と世界の民主主義の発展を考えるなら、彼の当選は祝福すべきことだろう。頼清徳は韓国との安保協力及び半導体連帯を強化すると公約し、今後、台湾と韓国のさらなる連帯が期待される状況にある。熊本のTSMC工場を通じて、今後九州を媒介に韓国・台湾・日本（九州）の半導体連帯が強化されることを期待できるだろうか。台湾・九州・韓国をつなぐ半導体連帯！熊本で聞いたタクシーの運転手の発言が、貧弱な私の想像力を強く刺激する！

韓国も日本も、人口と富の首都圏集中はすでに深

刻な問題になっている。しかし、福岡は日本の地方都市の中で唯一人口が増えている都市だという。どんな理由があるのだろうか。大規模な人口を引き寄せる産業があるわけでもなく、IT企業が繁栄しているわけでもない都市に、なぜ若者たちが集まってくるのだろうか。ひょっとして観光産業のおかげなのではと想像してみたりもする。しかし、福岡にも衰退の雰囲気が完全に消え去ったわけではない。日本の大学ランキング10位圏を今も守っているのは、有名私立大学ではなく、ほとんどが旧帝国大学の流れをくむ地方の国立大学である。九州大学も例外ではなく、ランキングの上位を維持している。しかし近年、首都圏の主要私立大学に人材が集まっているため、九州大学の教授たちの悩みは深くなっているという。地方の国立大学がほぼ没落した韓国に比べれば、日本の地方の国立大学はまだ健闘していると

いえるかもしれない。人口は増えているが、福岡も大学の質が脅かされているのだ。

福岡と九州の新しい未来を、韓国や台湾、そして東アジアとの交流・協力・紐帯を通じて期待できないだろうか。日本市民の好意は、私に世界市民意識を目覚めさせた。年配のほとんどの韓国人は、韓国が先進国になったという報道や、韓国の1人当たり国民所得（購買力評価=PPPで換算）が日本を超えたという数値を、すぐに「絶対的事実」として受け入れたりはしない。そんな彼らにとって、特に九州に住む日本人の好意は、なかなか素直に受け入れられないかもしれない。それでも、九州は私に「国の境界を越えて誰もが平和に暮らせる世界」、つまり世界市民としての希望を語っていた。私は今、九州の歓待を思い出しながら、東アジアの連帯と世界市民の希望を想像してみたい。